

小説

時の世にいだかれて (その二)

ゆとろ 満

一 アメリカ兵がやって来た

子どもは年齢が上がるにつれ、その行動半径も広がって行く。東彦とてもその例外ではなかった。むしろ同年齢の子どもたちよりも広がった。行動半径が広がると出会いも多くなる。人との出会いで最も驚いたのは黒人兵であった。

「連合国のアメリカ軍第八軍所属の第一四軍団が仙台市に入ったのは一九四五年（昭和二十）九月のことであった。アメリカ軍は原町苦竹、榴ヶ岡、川内などの旧日本軍関係施設を接収してキャンプ（駐屯地）を設営し

た。第一四軍団は、同年末第九軍団に統合され、翌年その司令部が札幌から仙台に移された。仙台は東北地域の進駐軍統治の中枢都市となった。」（『仙台市史』第三章第一節「戦災復興事業」）

当時、東京と仙台を繋ぐのは国道四号線と鉄道であった。四号線は中田町から名取川を渡り諏訪町、そして長町、更に広瀬川を越えて仙台市中心部に至る。諏訪町内を走る四号線はろくに歩道もなく片側一車線の道路であった。東彦が小学校へ入学した当時の昭和二十四年頃の国道は、自動車よりもむしろ馬車やリヤカーが大手を振って通行していた。畑の肥料用として馬糞拾いをする

子どももいた。

こんなのんびりとした国道に突然左ハンドルの、これまで目にしたことのない迷彩色の軍用車が轟音を上げて走るようになったのである。当初、「アメリカ兵は人攫いだ、アメリカ兵が来たら隠れる」とか「女はみんな強姦されるから家から出るな」などとまことしやかに囁かれていた。東彦の母も「東彦、いいが絶対にアメリカ兵など見に行ったらだめだぞ。連れていかれ（行かれ）て二度と家族と会えなくなるからな」としばしば念を押していた。ほんの五、六年前までは「鬼畜」と嘲っていた相手である。また、もつと遡れば「ケトウ（毛唐）」とか「南蛮人」と蔑んでいた。その彼らが「人さらい」と

会に浸透していった。東彦の村内一番の農家の主はその傲慢な対応から「マッカーサー」の渾名を献上されていた。「マッカーサーの命令だ」という言葉は東彦たち子どももよく耳にしていたほどである。現人神の天皇の地位をマッカーサーが受け継ぎ、新たな支配者として日本に君臨したのである。

「行っちゃ駄目だ」と言われるとなお行きたくなくなるのが人の性というものである。まして何事にも興味を抱き、考えるより行動が先の腕白ぼうずたちはなおさらであった。口やかましい母親たちの注意や小言は日常茶飯事であった。しかし、大概の子どもたちは馬耳東風であった。「明日のお昼過ぎごろアメリカ軍が諏訪を通る」という情報は、東彦たちのような子どもたちの耳にもすぐに入ってきた。こんな話を耳にしたら、腕白ぼうずたちはうずうずして居ても立ってもいらなくなるのは当然のことであった。

東彦にとって諏訪町は通い慣れた所であった。距離にしても自宅から二_三程であった。そこには父方の大叔父が住んでいて、東彦は幼い頃から父親に連れられてよく遊びに行っていた。東彦と同年の女の子や三歳上の男の子・智吉がいた。智吉は東彦を弟分に見たて、行くと

また、マッカーサーの名前と彼の権威も急速に日本社

知られていることでもある。

いつも一緒に遊んでくれた。「智吉ちゃん家に遊びに行く」と言えば、母親は大概許してくれた。「アメリカ軍を見に行く」口実もこの手を使えばよいのである。

その日の遊び仲間はいつもの五人であった。一番の年長は六年生の功、ついで五年生の次男、そして三年生の実と勝、そして東彦であった。功は敬意を込めて「イサオちゃん」、実は「ミノコ」、東彦は「パッサ」、次男と勝はそのままツギオ、マサルと呼ばれていた。

問題は集合場所である。五人がつるんで出かければ母親たちの耳にはすぐに入ってしまう。この当時の彼らの母親たちの子ども観は、まず家の手伝いをする子が一番よい子で学習のときは二の次であった。そして子ども、特に男の子はワルさをするのが当たり前前の認識であった。そんな訳で子どもたちがつるんでいると疑いの目で「何している」という声が必要飛んできた。しかし、子どもたちの側にはそう見られてもやむを得ない事情はあった。母親たちからは「駄目だ」と言われることをいつも「やらかす」存在であったからである。子どもたちは子どもたちで母親のそんな見方を十分に承知していた。これが駄目と言われればあれをやり、あれが駄目だと言われればまた別な「悪さ」をする。いわば「モグラ叩き」のよ

うなものであった。必然、監視の母親を出し抜く知恵を磨く日々でもあった。

従って「アメリカ軍」を見に行くためにつるんでなぞいたらすぐに声が飛んで来るはずだった。「どこさ行く」「何しに行く」などと。それだけに、彼らの頭の中には母親たちに不審がられないように「目立たないように二、三人に分かれて行動する」という考えはすぐに浮かんで来た。そして、二つに分かれた子どもたちは線路沿いに通っている三間道路を左折し、五十メートルほど先の日新燃料会社の正門前に集合した。ここまで来るとさすがに母親たちの目は届かなくなつた。集合するとお互いに顔を見合わせ、にっこりとした。十一月の初めというのに子どもたちはうつつすらと額に汗をかいていた。緊張のせいだろう。

「いいが、みんな絶対に離れんなよ。相手はアメリカ人の兵隊だ。何すつかわがんねえがらな。とにかく勝手な行動は一番悪い。一応俺が大将だがおれの言うとおりにするんだよ。わがったが」

イサオは生真面目な顔で「わがったが」の言葉に力を込めた。

「うん、わがった。今日はイサオちゃんの命令に従う」

ツギオは「気を付け」の姿勢を取りながら大きな声で応えた。しかし、その顔はにやついていた。

「わがった、わがった」

後の子たちも次々に応えた。

「一応おれが一番年上だから責任があるしな」

イサオは少し照れていた。

東北金属の正門前を右折するとすぐにガードが見える。その上を国鉄東北線の貨物列車専用の線路が走っていた。ガード下の道路は鍋底のように一段と低くなつており、少しの雨で水が溜まってしまふ。幸い歩道は道路より一メートルほど高く、しかも勾配はなく、平らになつており、水に浸かることはなかった。ガード下をくぐると上り坂になり、突き当たりが国道四号線であった。この四号線は東北本線を跨ぐつくりになつておりいわゆる高架式の道路であった。パッサたちは突き当たりの高架式の道路手を左折し、諏訪町に入った。

「大丈夫か」

ミノコが乾いた声で誰となしに言った。国道を目の前にして緊張が高まつたのだろう。不安が押し寄せて来たのかもしれない。

「みんな心配すつことねえ。さつき言ったようにまと

まつて行動すればおつかねえことばねえから」

イサオが宥めるように低い声で言った。その後、ごくりと唾を飲む音が微かにした。彼も緊張が高まつていたのだろう。

いつも髪を刈ってもらっている床屋の看板が見えた。

東彦と同じ姓なので当初は親戚かと思つたが、全く縁はなかった。しかし、そのおばさんは、パッサにとても親切にしてくれた。この当時、男の子はほとんどいがぐり頭であった。ところがパッサだけは長髪、いわゆる坊ちゃん刈りであった。長髪の髪は走るとパッサパッサと音を立てて上下に揺れる。東彦が「パッサ」と渾名された由縁はこの髪型にあった。これは何もパッサの希望ではなかった。単なる母親の趣味であった。彼女は、裁縫学校を卒業した後の十九歳の時に東京の遠縁の所に働きに行っている。都会帰りという気位を息子の頭に反映させていたのかもしれない。床屋のおばさんは「東彦のおかあちゃんはおかあかなハイカラだな」と、そして「東彦にこの髪型はびつたしだよ」と褒めてくれた。しかし、時に友だちから囃し立てられることもあり、四年生になつたときにはみんなと同じように坊主頭にしてしまつた。

その床屋の前に男たちが身を潜めるようにして固まっていた。女性や子どもたちの姿は全く見えない。恐いもの見たさで集まった男衆たちであった。

男衆の中には印ばんでんを荒縄で結んでいる者もいた。そしてその大部分は藁草履ばきで、味噌に漬けたような手拭いでほっかぶりをしていた。年齢は二十代から六十代とまちまちであった。貧相な集団ではあったが、眼は異様なほどに光り、しかし、唇は乾いて見えた。

「床屋の前はまずいぞ。おとなたちがもう来ているよ。すぐ追っ払われちゃう」

「んだんだ。おとなに見つからないどころか別なところにすつべや」

イサオはツギオの言葉がもつともだと大きくうなずいた。

「そしたらおれのところの親戚の前につつべや。家の前に木が植えてあつて隠られるからいいと思うけど」

「パッサ、おめえながながいい考えを出すな。みんなそこにすつべや」

イサオの一言で子どもたちは一斉に身を低くしながらそろそろと移動した。

子どもたちが植木の陰に移動して三十分もしないうち

「イサオちゃんは物知りだなあ」

パッサは感心した。

「イサオちゃんの父ちゃんは駐留軍にかしいでいる（働いている）がら詳しいんだ」

ミノコがまるで自分の父親を自慢するかのように鼻をうごめかせて言った。

イサオも頭を反らして満足そうだった。

ジープの後ろにはそれを十倍にもしたような同じスタイルの大きな車で、有蓋車であった。そして、その後を抱えた兵隊の姿が幌の隙間から見えた。この大型車両の後は更に大きな無蓋の運搬車両が続いた。その荷台には戦車が積まれていた。全ての車両がライトを点けエンジン音を轟かせ走行していた。車列が通過し終わった。次第に小さくなっていく車の後ろ姿を、子どもたちは、口をぽっかりと開けて見続けた。赤い尾灯がパッサには鬼の目のように見えた。

「アメリカ人を見たか」

ミノコが沈黙を破るように、誰となく向かって口を開いた。

「最初のジープに乗っていた四人だけだつちや」

に、「来たぞう」とミノコが叫んだ。「どご、どご」と言いながら全員が木陰から飛び出し南の方を見た。小さくすんだ黄色い光が猫の両眼のように見えた。

「あれだ」

イサオは叫んだ。そして、

「いいが、小さい順に一列に並ぶんだ。マサルが先頭だ、絶対に道路にはみ出すなよ」

毅然とした口調であった。子どもたちはイサオの強い言葉に気圧され、黙って彼の言葉に従った。

先頭の車は次第にその輪郭を明確にしてきた。人の姿もはっきりとしてきた。先頭の車の色は濃い緑色で、車両には鉄兜を被った兵隊が前後二人ずつの合計四人が乗っていた。赤みがかった白い顔の中央の鼻が高かった。助手席の兵隊が右足をさも邪魔そうに大きく「く」の字に折り曲げていた。編み上げのブーツが黒くびかびかに輝いていた。ハンドルの位置が日本車と反対であった。

「かっこいいな。あの車何ていうんだ」

マサルの問いに、

「ジープっていうんだ。日本の車と違って屋根がねえべ、それにもすごく馬力があるらしい」

イサオは得意そうに答えた。

ミノコの問いに次男が答えた。

「おれは白いアメリカ人も黒いアメリカ人も見たぞ」

「イサオちゃんいつ見たんだ」

「大型トラックが通過して行った時に後ろから見えたんだよ。ツギオは見なかったのか。教えてやればよかったな」

「黒いアメリカ人って体全部が黒いのイサオちゃん」

パッサの頬が紅潮している。紅い頬が彼の関心の強さを示していた。

「俺たちは黒いアメリカ人も白いアメリカ人も今日初めて見たんだ。黒いアメリカ人は黒人で、白いアメリカ人は白人って言うらしい。黒人を見たのはおれだけみたいだけど顔しか見えなかったよ。何しろ車の中だから少し暗かったからね。その上、車はスピード出していたからね」

「そうか、白人と黒人か。そしたらおれたち日本人は何人だ」

ツギオが首をかしげながら言った。

「おれたちは何人っていうのかなあ。今度あんちゃんに聞いておくよ」

イサオがそう言ったときだった。

「あつ、アメリカがまた来たよ」

と、パッサが叫んだ。子どもたちは一斉に振り返って南の方に視線を移した。どうやら第2団がやってきたらしい。

「今度は黒人をしっかり見るぞ」とツギオが言った。

先頭の車両はやはりジープであった。そのジープの運転手と助手席に座っていたのは黒人であった。

「あつ、黒人だ」

目ざといツギオが指を指しながら叫んだ。そしてそのジープが目の前を通り過ぎようとしたとき大声で「アメリカ人」と叫んだ。他の子どもたちは驚き、ツギオを制止しようとしたが遅かった。しかし、その声が助手席の兵隊に聞こえたようだった。彼は黒い顔を子どもたちに向けた。笑顔であった。白い歯が際立っていた。そして何やら叫び、手を振った。ツギオの叫び声でどうなることやらと思っていたイサオは「アメリカ人の黒人って恐くねえな」とほっとした声で言った。他の子どもたちも「んだ、んだ」と安心したように相槌を打った。

「黒人って本当に黒いんだね。顔も手も黒かったね。それに笑った時の歯が真っ白だった。どうして黒い皮膚と白い皮膚の区別があんだらうねえ。不思議だ。おれた

ちは黒人と白人の間なのかね」

「パッサは随分と黒人に興味持ったみたいだな。でも、かあちゃんたちがアメリカ兵はおんかなえ（怖い）といってるけど、そんなごどねえみだいな。それに大きくてがっしりしていたなあ。あれじゃ日本人は負けるね」

「うん、おれもそう思った」

ツギオとミノコが口を揃えて言った。

「とにかく今日のこのことは絶対に秘密だからな。他の友だちや家の人たちにはしゃべったらなんねえぞ。しゃべった奴は仲間から外すからな、わがったが」

「わがった、わがった」

イサオの言葉に他の子どもたちは口を揃えて応えた。子どもたちにとつて、仲間外れは死活問題であった。子どもたちが生活している「村社会」は地縁、血縁が極めて濃厚で、子どもたちの繋がりがりも幾重にも重なっていた。一つの関係の破綻は全ての繋がりの破綻に帰着する。そうなる地域でも学校でも孤立し、子どもとしての生活基盤が失われるほどの危機に瀕するのである。

帰途、子どもたちはあまりしゃべらなかった。珍しいことであった。子どもながらに衝撃を受け、色々と考え

ることがあったのだろう。この日は、恐らく言葉は知ら

なくても「人種」というものについて初めて考えを及ぼす機会を持ったにちがいがなかった。

パッサも「皮膚の色の違い」というものにこの日初めて直面した。「どうして皮膚の色の違いというものがあ

るのだろうか」と考えさせられたのである。それは「人種」という問題でもあった。しかし、これらについての知識など全く持ち合わせていない状況で、抱いた疑問の解決など望むべきもなかった。だからといって思考が停止するわけでもなく疑問だけがいたずらに膨れあがっていくのであった。さらに、白人と黒人が一緒に車に乗っていることも不思議でならなかった。また、今まで見たこともない頑丈で性能のよさそうな車とその車列に圧倒されたのだった。昼間にもかかわらずヘッドライトを煌煌と点け、轟音以外無言で、疾走する様は空恐ろしくも有り、まるで地球外からの訪問者のようにも思えたのだった。恐らくパッサは人生で初めてのカルチャーショックというものを受けた日であった。そして何よりも「アメリカ人」という言葉が頭脳に深く刻印された日でもあった。

二 泥にまみれての日々

パッサたちの遊びは季節や年齢によって大体決まっていた。冬の間はスケートやサッカーであった。仙台地方はそれほど雪が多いわけではなかったが気温は低かった。そのため霜柱がよく立ち、氷も張った。ところが日が登るにつれ気温が上がり、霜柱は溶けてくる。溶ければ地面が泥状になってしまふ。このような状態では通常の遊びができない。また、時折雪が降った。これが根雪となれば格好の遊び場になるのであるが、連続して雪が降ると言うことはほとんどなかった。従って二、三日すると雪は溶け始め、やはり地面がぬかるみ状態になってしまう。そのため動きの多い遊びはできなくなる。このように冬季、そして春先まで地面はぬかるんだ状態が当たり前であった。従って子どもたちの大部分はゴム長靴を履いていた。

地面がぬかるんでいてもできる遊びとなると限られてしまふ。このような条件下でも楽しめたのがサッカーであった。サッカーでは手をほとんど使わないことが幸いしたのだ。何しろ地面はぬかるみである。ボールはたちまち館をまぶしたような状態になる。手に持てば手が泥

だらけになってしまふ。誰しもボールを持つことは避けなかった。ルールは三角ベースと同様ごく簡単であった。反則はハンドとボールアウトぐらいであった。また、場所には田んぼがほとんどであった。田んぼは周りに幾つもあり、その上、四角形である。コートとしてそのまま使える。サッカーの遊び場として最適で便利であった。当然ながら水はけのよい乾いた田んぼが選ばれた。

田んぼはスケート場としても利用された。中学生を頭として下は小学の低学年生たちまでが仲間となって田んぼをスケートリンクに変えるのである。樹木の日陰になる確率が多く、水を導入しやすいため田んぼを選んでリンクにする。いくつかのグループを作り、当番を割り当てるのである。当番の子たちは夕方田んぼに水張りに行く。水は川から引き入れるのである。一定の高さに水が張ったから水を止める。翌朝はそれぞれ鎌を持参し、全員で氷の上に突き出した稲株を切り取る。そしてまた水を張り、氷を段々と厚くしていくと一週間もすると立派なリンクになるのである。

子どもは遊びの天才とも言える。遊びの中で次々と新しい遊びを工夫し、生み出していく。また、足りないものは何とか補い、不可能には知恵を絞って可能ならしめる。

る。これらのエネルギーの源泉は、恐らく彼らの飽くことのない探求心と好奇心であろう。しかし、残念なことではあるが、これらは上級の学校に進むにつれ希薄になっていく。

この頃革製のスケート靴を持っている子どもは皆無であった。多くは金属製のブレードを長靴に革バンドで固定したものであった。これは機械スケートとかカチャスケートなどとも呼ばれていたという。他方で「仙台スケート」と呼ばれる物があつた。明治30年（一八九七年）、仙台市でイギリス人デビソンと旧仙台二高生徒が、共同で仙台式下駄スケートを開発したという。そして、このスケート靴は「仙台スケート」という商品名で売り出され、徐々に普及していった。この仙台スケートは機械スケートと同じ仕組みで、靴に国産のスケートを真田紐でしばりつけたものであつた。恐らくパッサたちが使用したスケートはこの仙台スケートであつたと思われる。しかし、パッサたちはこのスケートを「バンドスケート」と呼んでいた。革バンドでスケートと靴を締め付け、固定するからである。このバンドスケートの弱点は足首を捻挫しやすいことであつた。当然ながら履いている長靴は足よりも大きい。子どもたちの靴は成長を考え皆大き

めである。従って、長靴の中で足が踊っているような状態である。元々不安定な状態の足をバンドでスケートに縛り付けても足の不安定さは消えない。ぐらぐらしたままの足でカーブを曲がり急停止をした場合、どうしても負担がかかる。場合によっては捻挫につながってしまうのである。ところでこのバンドスケートを持たない子どもたちはどうしたかというところ、孟宗竹を靴のサイズより十センチほど長く切り落とし、更にそれを縦半分に切る。そして先を楕円形に切り落とす。さらに下駄のように三箇所穴を開け、鼻緒を通すのである。竹下駄である。滑りは全く悪い。それに直線専用で曲がることはできない。しかし、これでも子どもたちは結構楽しんで遊んだのだ。

「日本スケートの発祥の地は仙台の五色沼だ」とパッサの母の由美は良く自慢をしていた。そして「稲葉悦子嬢がその五色沼で滑ったんだ」と、さも自慢そうに話していたのをパッサはよく覚えていた。

五色沼とは仙台城をめぐる堀の一部で、仙台城三の丸の北面から大手門隅櫓の前に広がる。また、稲田悦子とは、日本女子フィギュアスケートの先駆者で、十二歳で日本代表としてオリンピックに参加し、その後、コーチ

として後進を育成した。

仙台が雪国であつたらパッサたちはスキーを楽しんだのだろうが、あいにく蔵王連峰が大きな壁となって雪を遮った。そのため冬季は乾燥した寒冷な空気が吹き下ろし、田んぼのリンクという遊び場を作らせることとなつたのである。

スケートの他にたこ揚げもよくした。パッサたちが揚げたたこは「イカだこ」と称したもので、全て手作りであつた。本体は新聞紙と竹ひごで作る。新聞紙を広げ、三角に折り曲げて残りを切り落とす。折り曲げたものを再度広げると、正四角形ができあがる。その正四角形の対面する頂点を結んだ線が背骨となる。新聞紙は菱形になる。残った両サイドの端が手となる。線で結べば十字の形になる。この両サイドの端を弓形に曲げた竹ひごを貼り付ける。その時、両端から竹ひごが五センチほど出るようにする。出た部分が手となる。この手に、先端を切り込んだ長方形の新聞紙を貼り付ける。たこが揚がった時にこの手が風にひらひらとなびくのである。次に背骨部分の上端と下端に竹ひごを貼り付ける。下端の竹ひごはやはり五センチほどはみ出すようにする。そこに足を貼り付ける。足は、切り取った新聞紙で幅五センチ、長さ一ぱいほど

の細長い紙で作る。これは、たこが上空に揚がった時、たこを安定させる役目を果たす。例えるならば船の舵やヨットの船底に付いているバラスト・キール（重し）のようなものである。後は背骨の部分二箇所糸を通し、たるみをつけ、その真ん中よりやや上部に揚げ糸を結ぶとできあがりとなる。何の障害もない田んぼで揚げる。蔵王おろしの風を受けたたこはよく揚がった。

たこ作りでは小刀、肥後守が活躍をしたのは言うまでもない。このたこ作りで細い竹から竹ひごを作るとき、細かい作業が必要だったこともあり、手指を傷付けることが多かった。ろくに手当てもせず、包帯代わりに手ぬぐいを切り裂いて用いた。更にあまり清潔とは言えない風呂にこの傷を浸けたりしたが、ほとんど化膿もせず治りきった。赤チンの効果なのか、耐性ができていて傷に強くなっていったのかはつきりしないが、生活が貧しかったことに反比例して子どもたちはたくましく、傷にも強かったと言える。

夏の遊びはやはり水遊び・水泳であり、また魚捕りであった。水遊びと水泳には歴然とした区別があった。水遊びは二・三年生ぐらいまでの子がするものであった。場所は決まっていた。諏訪神社そばの当時としては珍しい

三面コンクリートの川であった。幅が二メートルほど、深さはせいぜい五十センチほどであった。しかし、水流が速く、その水流に押し流されるようにして遊ぶのが楽しかった。時折、フナやドジョウ、ナマズなども顔を見せた。そんな時には子どもたちは大騒ぎをして追いかけたものであった。勿論、逃げる魚の速さにかなうはずはなかったが。

水泳は、この神社から子どもの足で一時間ほどの距離にある名取川であった。その頃、名取川には砂利の採取船が導入されるほど砂利採取が盛んであった。従って、採取の終えた箇所は深さが五、六メートルもある極めて危険な川であった。ほとんどの遊びにおとなは全く介在しなかった。全て年かきの者か、指導力に富んだ者がリーダーとなって仕切った。

毎夏、名取川では溺死者が必ずいた。それだけにパッサの母親もこの水泳には神経をとがらせていた。事実、パッサは中学生になるまでの間に二回溺れ、死にそうになった。一度は三年生の時である。対岸に泳いで渡ろうとしていた時である。全員が渡り終えた。しかし、まだ泳力に自信がなかったパッサはためらい、ひとり残された。しかし、仲間には従わなければならない。みんなの

声援を受け飛び込まざるを得ない状況に追い込まれていった。パッサは勇を振るって飛び込んだ。ところが案の定、川幅の三分の二ほど進んだ所で力尽きてしまった。がぼがぼと水を飲み、沈み始めた。それを見たパッサの隣家の成志が飛び込んで助けに来てくれたのだ。

成志はこの時中学二年生であった。助けに来た成志にパッサは無我夢中ではがみついていた。小学三年生とは言え、あらん限りの力ではがみついたものだから成志の体の自由が利かなくなり、二人もろとも沈み始めた。

この時、成志はかろうじて動いた右手で思いつきりパッサの顔を殴りつけた。殴られたパッサはその痛さとショックでしがみついた両手を緩め、離れた。その瞬間、成志は後ろに回り、パッサを抱き上げてくれた。そして「慌てるな、大丈夫だから手を離せ」と叫んだ。パッサは半ば気を失いかけていたが、その言葉に安心し、込めていた力を抜いた。そのお陰で成志はゆっくりとパッサを救助することができたのである。岸で見えていた他の子どもたちも手を差し延べ、パッサを引き上げてくれた。岸の砂利の上でパッサは早い呼吸をしながら手足を投げ出し、しばらくぐったりとしていた。ようやく呼吸が落ち着いた時、真っ先に澄んだ青空と、綿菓子のような

真っ白な雲が目に入った。その雲の白さと空の青さはパッサの頭の中いっぱい広がっていった。パッサは「空はなんでこんなに青く、雲は白いのだろう」と思った。そして「命が助かった」という言葉がひよいと浮かび、目尻からひとしずくの涙がこぼれ落ちて来たのだった。

もう一度は砂利採取船のある深みである。砂利採取船は船体前方から真ん中にかけて長さ五メートル、幅二メートルほどの空間がある。そして船体中心部に七、八メートルあるかと思われる櫓が設置されている。この櫓から川底に向かって巨大なチェーン状のものが取り付けられている。それには砂利を掬う箱のような形状のものが十個ほど設置されている。それは先端が鋭利で川底の砂利を掘り取り、箱に収める仕組みになっている。さらに箱の底は網状になっていて水が抜けるようになっていく。その採取箱が回転して川底を掘り、船上に戻ってくるに連れ箱は反転し、採取した砂利が落ちるといふ仕組みになっていた。砂利の落ちて来たところには金網が張っており、ある大きさ以上のものは金網の目を通過せず川に戻される仕組みになっていた。

その日は船の操業はなかった。水の色は深い青色で、鏡のように静まり返っていた。計り知れない深さのよう

に見え、川の主が棲んでいるといってもおかしくなかった。砂利で盛り上がった岸に立つと吸い込まれそうであった。恐ろしさで足が竦んだ。しかし、何かがパッサの背を押していた。パッサは足を一步進めた。すると脆い砂利の積み重ねの、垂直に近い岸が音を立ててそのまま崩れ落ちていった。あつという間にパッサは水しぶきを上げて水中に落ちてしまった。沈みながらブクブクと泡を口から吐いた。川底まで沈んで行く、と思ったが実際は一層ほどであった。思いがけない成り行きにパッサは慌ててしまった。それが第一の誤算であった。

気持ちが悪まらないまま仕方なしに泳ぎ始めた。水面の水はぬるく、パッサはそれに誘われるようにして潜った。潜るとこれまでにないような快感が体を走らせた。川の中は上から見るのとまるで違っていた。いびつながらも青空が見えた。しかし、川底はなお深く、水底は少しも見えなかった。しかし、オイカワやアユの俊敏に動く姿があたりこちに見えた。その魚たちを追うようにパッサは更に潜っていった。三層近くだったろうか、突然、体が冷えた。冷水層に潜り込んでしまったのだ。ここは川底から水が湧いていたのである。湧水は水温が低い。そのため底の方に層となつて溜まるのである。パッサは

慌てた。そして危険を察知した。急いで水面に向かおうとした。すると体がひどく重く感じられたのである。急な水温低下で筋肉が硬直したのかもしれない。次に思うように腕が、足が動かなくなったのである。心臓の鼓動が速くなった。パッサは「しまった」と思った。こんな風に体の自由が利かなくなるのは想像もしなかったのである。これが第二の誤算であった。その誤算に気付くと体は一層言うことを利かなくなつていった。

体が沈み始めた。このまま川底に沈み込めばおしまいだと観念した。そして、昨年の夏に、鉄橋の橋脚の深みで溺れ死んだ六年生の加藤くんのがふつと目の前に浮かんだ。「おれも加藤くんになるんだ」と思った。力が抜け、諦めかけた。その諦めがよかつたのかもしれない。わずかに筋力が回復し、咄嗟に足を蹴った。すると体が上方に進み始めた。青空が見え、白い雲まで鮮明に見えた。パッサは「助かつた」と思った。しかし、第二の困難が待ち受けていた。

岸は掘り起こされた大小様々な石で崖のようになっていたのである。岸について手を掛けて登ろうとするとその先から崩れ落ちて来るのである。ちようど蟻地獄の有様であった。しかし、岸に着けば慌てることはなかった

のである。パッサはそのことに気がつくどゆつくりと呼び、体を休め、力の回復を待たしたのであった。その時、パッサの眼から熱い涙が転げ落ちて来た。九死に一生を得た思いが、体の底から湧き起こつて来たのである。そして、眼に入る光景がいかに新鮮に見えたのであった。

冬季を除いて年間を通してやっていたのは野球であった。野球といつても二種類あつた。簡易ベースボールともいうべきものと、本格的な軟式野球である。簡易ベースボールは三角ベース野球である。二塁ベースがなく、ホームベースと一塁ベースそれに三塁の三つのベースで、これを直線で結ぶと三角形になることから三角ベース(野球)と呼んでいた。ボールはゴムボールでバットは竹棒である。一チーム人数が四、五人ででき、またボールがそれほど飛ばないこともあつて比較的狭い路地でも可能であつた。また、就学前の子どもから中学生くらいまでの幅広い年齢の子どもたちが一緒に楽しめるということも三角野球の大きな特長とも言えた。小さな子が打つときにはゴロを投げてやる。打者はバットを地面に沿つて振るのである。年齢に応じた工夫が凝らされていたのである。

ミットとかバットとかの用具も必要ない。ボールもゴ

ムボールがないときは、布を糸でぐるぐると巻いて作つて使用することさえあつた。不足や困難は自分たちに知恵で克服していった。貧しくとも子どもたちは遊びをかようにも工夫して創り出していった。空き地や野原、田んぼでの主役は子どもたちであつた。

このように子どもたちは早くから野球に親しんでいたこともあつて、軟式ボールの野球も大変盛んであつた。パッサたちの学区は六地区に分かれていた。小学校の運動会のプログラムには地区対抗リレーがあつたし、また、地区対抗野球大会も毎年の夏休みに開催されていた。この地区対抗野球大会は親も力を入れていた。監督を買つて出た野球好きの父親が熱心に指導をしてくれていた。大会ともなれば各地区の選手の家族ばかりでなく他のおとなたちも多数応援に駆けつけていた。最員の引き倒しになりかねないほど応援に熱が入つた。選手は五、六年生が主体で、稀に四年生の選手もいた。日曜日や祝日にはおとなが指導することがあつたがほとんどは子どもたちで自主運営をしていた。パッサたちのチームの練習場は小学校の校庭であつたが、キャッチボールの練習などは道路や庭でやつていた。道路と言つても自動車は通るわけでもない。時折リヤカーや人通りがあるだけであつ

た。また、大概の農家の庭はキャッチボールができる広さが十分にあった。

グローブやバットはまだまだ貴重品で個人用のものは少なく、チームの親たちがチーム用として購入してくれていた。それらを使って練習していた。パッサの場合は、父親がグローブ、バット、ボール（軟式用のゴム製のボール。パッサたちはこのボールを健康ボールと呼んでいた。ボールに印された[㊦]という商標がその由来であった）を購入してくれたからである。これらはパッサが使用するよりも他の上級生たちが使用することが多かった。

恐らく、当時、日本全国の男の子たちの大多数は野球ファンではなかったかと思われる。パッサの最員のチームは阪神タイガースで、選手では物干し竿の異名を取った藤村富美男であった。当時はまだテレビが放映される前であり、ラジオが情報入手の媒体であった。動画がなくても胸をわくわくしたのはそれだけ当時の子どもたちの想像力が豊かであったという証左であったのだろう。

相撲もよくやった。パッサが相撲に熱中した当時、東富士、鏡里、千代の山、吉葉山などの横綱が活躍した時代である。パッサの最員は関脇時津山であった。おとな

も子どももラジオの音声に耳を傾け、一喜一憂していたのである。そして、夕飯時には親子の共通の話題として食卓を賑わし、豊かな場を作ったのであった。「親子のふれあい」などというまことしやかに、勿体ぶったこと

ばなどいささかも必要なかった。父親は父親であり、母親は母親であり、そして子どもは子どもであった。親子関係の確かな社会が存在していた。また、これらの遊びの自主運営の基盤は子供会にあった。地域に何代と根を下ろして生活してきた絆というものが次の世代を担う子どもたちにもしつかりと受け継がれて生きていたと言えよう。従って夏休みのラジオ体操会や神社を使つての勉強会なども何の抵抗なく行われていたのである。

世相と言えれば相撲もそうであった。これも場所取らずで、しかも闘争心旺盛な男児を満足させる遊びであった。ただ問題はズボンのベルト通しがすぐに切れてしまうことであつた。そのことは母親の負担を増すことである。切れたことを当座隠してもすぐに露見してしまうのは必然であつた。その度に「まだ仕事^{すごと}こしえて」と母親に叱られるのであつた。

子どもたちの遊び一つ見ても、その社会の情勢や世相が色濃く反映され、影響を受けていることがはつきりと

分かる。その意味では子どもも「時代の子」というのは確かなことであると言えよう。

三 探検(いぐね)

「探検」という言葉はいつ、どのようにして記憶の箱に入ったのだろうか。パッサには知りようがない。しかし、七十代半ばの老境に入ってもなお、心動かせる言葉であるのは不思議である。

小学校に就学するかしないうちからパッサはその言葉を口にしてきた。その頃はいつも母屋の従兄弟の洋平と一緒にであった。「探検に行く」と言ってもその範囲は屋内に限られていた。屋敷と言っても畑地を含んだその面積は三反歩(約三千坪)と広大である。

洋平の家は伝統的な藁葺きで、座敷と居間、台所、隣接して納屋と馬小屋が連なっていた。馬小屋の西側には小川が流れており、その小川に洗い場が設けられていて、食器洗いや洗濯物の濯ぎの場になっていた。小川の水は風呂水にも利用されていた。風呂場と便所は並んでおり、馬小屋の南側に対面するようであった。この風呂場の後ろ、小川に沿って大きな倉庫があつた。その倉庫は壁が

なく柱がむき出しになっていた。トラックの車庫として使われていた。また、稲わらや資材などの置き場になっていた。この倉庫はパッサたちの格好の遊び場でもあつた。特に雨の日には、子どもたちには大変ありがたい遊び場となり、必然的に近所の子どもたちも寄り集まってきた。パッサの家はこの母屋の裏、即ち北側にあつた。かつては隠居家であつたようだ。そしてこれらの建物を囲むように南、西、北側に広い畑があつた。更に、この畑の外側を「いぐね」という屋敷林が巡っていた。特に西側のいぐね部分は樹木が密集していた。

パッサたちの最初の探検地はこのいぐねであつた。何の変哲もない林ではあつたが、竹と雑木が混在し、地面は湿り、闇に連なるような深さがあつた。ある日、パッサたちはこのいぐねの北端に苔むし、朽ちた石橋があるのを発見した。さらに、これまた苔に覆われた石柱を見つけたのである。「大発見」とばかりに母親たちに注進に及んだのはいうまでもなかった。これはパッサが成人近くになって知つたのであるが、母親の由美の実家は代々「星祭り」というものを司つていたという。星祭りは、新しい季節を迎える節目にある節分に、一年の幸運、厄除けを願ひ、そして仏様の御加護をいただく祈願をする

のである。田植えや種まきの季節を目前にした農民が大
雨、日照り、冷害などの自然災害の除くための祈りは大
事な儀式とも言えた。「仏様のご加護」と言っても土着
的自然崇拜の色彩が濃いものであった。従って格別お経
を上げるとか線香を焚くとかはなかった。近隣の農民や
親族が石柱の前にぬかずき礼拝するだけであった。もし
て、この祭りの後はご馳走を食べ、男衆には酒が振る舞
われ、賑やかに過ごすのである。むしろこの振る舞い酒
やご馳走が主とも言えた。このことからこの星祭りは
農繁期を前にしての骨休みも兼ねていたことが窺える。
農民たちは長い過酷な生活の中から自らを防衛し、楽し
みを作り出す様々な工夫を凝らしていた。この星祭りも
その一つと言える。子どもたちがこの「大発見」を注進
に及んだのはよかつたが「藪こぎなんかあぶねえごとす
たらだめだべ」と一喝されただけであった。

また、小学五年生の頃には缶詰の缶で照明用のランタ
ンを作り、大年寺山の洞窟探検に及んだこともあった。
大年寺山は今や住宅街と化し、樹木で覆われていた昔の
面影は全くない。パッサたちが子どもの頃は、住宅と言
えば亜炭掘りの坑夫の長屋ぐらいであった。また、防空
壕があちこちにあった。パッサたちが探検に及んだのは

が当時の村落には張り巡らされていた。別な言い方をす
れば地域が一体となって子育てをしていたということでも
ある。そういう中で子どもたちは、自ずと自らを律す
る力をつけるようになっていったのである。

四 長町競馬場

パッサたちが育った敗戦直後から昭和三十五年までの
間は、世の中が急激に変化していった時代であった。そ
の大きな流れにパッサたちの住む村落も巻き込まれて
いったのは当然であった。しかし、まだまだ昔からのし
きたりや伝統が牢固として残っていた。パッサが中学生
の頃（昭和三十年の半ば）までは青年団も健在で、神社
のお祭りでは御輿担ぎや宵祭りでの下働きの重要な担い
手であった。また、この祭りは盆踊りとともに地域最大
の行事で、子どもたちにとっても一番の楽しみであった。
お祭りでは水鉄砲とセルロイド製のお面を購入し、二手
に分かれ水鉄砲合戦するのが恒例であった。また「テ
ンヨ（トコロテン）」は必ず口にした。味付けは酢醤油
に砂糖を入れたものである。「所変われば品変わる」と
いうが、後年、パッサが神奈川で生活するようになって、

この防空壕の一つであった。勿論、この探検は母親たち
には内緒であった。しかし、勇んで出かけた割には、こ
の防空壕探検はつまらないものであった。たいした興行
きもなく、胸をときめかすようなものは何もなくあった
であった。

探検の一種であるが、パッサたちはよく仲間同士でつ
るんで遠出することもあった。この頃、パッサたちが住
む農村部では交通事故の心配は全くと言ってよいほどな
かった。事故と言えば水難が一番であった。村落内を歩
いている分には水難事故に遭うことはない。ただ、田植
え時から水路の水かさが増し、それにつれ水流も激しく
なる。なんかの拍子にこの流れに落ち、流されて水死す
るということはなく、子どもたちはこの流れに落ち、流さ
れるという同心的に自分たちのテリトリーを広げ、
知識を獲得し、生きる知恵を身に付けていった。

村落の中をつるんで歩いていくと必ず声を掛けられた。
また、村人が子どもたちの名前を知らなくても両親や祖父
の名前を告げると「どこそこのやろっ子（子ども）か」
と即座に分かってしまう。悪さをして名前が判明するも
のならばあつという間にその日のうちに親の耳に入って
しまう。そういういわば見えぬ監視機構みたいなもの

関東では砂糖の代わりに辛子を入れることに驚いたもの
だった。地域に住む者たちの楽しみや喜びは地域の行事
に深く関わっていた。このような地域の楽しみその他に子
どもたちにもう一つの楽しみがあった。それは競馬場へ
いくことであった。仙台競馬場である。

仙台競馬場は通称「長町競馬場」と呼ばれていた。場
所は郡山新新田（現在の東郡山）、宮城自動車学校のあ
るところである。すぐ北側には広瀬川が流れていた。記
録では昭和六年、沢口氏という人が開設したとある。そ
の後、紆余曲折を経、「昭和二十四年に戦後復興目的で
仙台市宮競馬場として再発足した。春秋二回レースが開
催された。開催時には近辺は馬、騎手、馬主、その関係
者と一緒に夢見る競馬ファン、その客目当ての商売
人などで大変な活気に溢れていた」。（『ぶらり長町』26
頁）

ミノコはパッサの遠縁にあたり同年齢の友人であった。
彼は運動神経に優れ、器用で頭の回転もよかつた。自宅
に農耕馬を飼っていたこともあつてか大変な馬好きで
あつた。父親が戦死し、祖父が一家の働き手ということ
もあつて、彼も幼いながら一家の働き手であつた。小学
生の低学年頃から馬の世話もしていた。そればかりでは

なく、田起こしや田ならしなどでは馬の鼻取り（馬の轡に二びほどの竹竿をつけ、その竹竿で馬を誘導する）を難なくこなしていた。小学校高学年以降になると、立派な一家の働き手になっていた。また、福島の競馬場などに馬の世話で爺さんと同行するようになった。そんなわけで中学校ではあまり登校もしなかった。しかし、馬好きが彼の前途を切り拓いてくれた。中学校を卒業と同時に中央競馬会の中山競馬場にある厩舎へ騎手見習いとして入舎した。この後、彼は障害レースで活躍した。引退後は北海道でシンボリドルフを支える一員となった。そんな彼であったから、競馬場のことはいち早く耳にし、爺さんと何度も行っていた。ミノコは仲間達を集めると早速競馬場行き相談を持ちかけた。持ちかけたというより「競馬場にいぐべ」という決定の伝達であった。何しろ物好きと好奇心旺盛な子どもたちであったから否応なしに決まった。

その日は五月初めの陽気の良い日であった。甘い春の風が子どもたちの鼻腔をくすぐり、活力を与えてくれた。総勢五人であった。パッサは小学三年生になっていた。競馬場は初めて行く場所である。ミノコによると競馬場は北目の北側であるという。パッサは北目までは何度も

行っているで迷うことはない。子どもの足で一時間はかからない距離であることは皆分りきっていた。ただ問題は母親にどう伝えるかであった。正直に「競馬場さいぐ」なんて言うものなら大目玉をくらい「家の仕事でもすてろ」と言われるのがせいぜいである。皆、うまい知恵がでず逡巡していた。更に解決すべき課題があった。どうしてもお昼にかかるものだから弁当が必要だったのである。隠れてにぎりめしを作ったとしても昼時にいかなかったら大騒ぎになってしまう。昼飯持参で出かける口実、それも母親を疑いもなく納得させる目的地がひねり出せるかということであった。しかし、大部分の子どもたちには勘の鋭い母親を納得させるだけの考えはなかなか思い浮かばなかったのだ。

その時だった。「子供会の見学の下見ってすつぺや。ちようど子供会で春の見学地をどこにすつぺかと議題になつてだつちや。おれが会長だから会長と一緒にいぐべになつた、と言えはいいよ」

「さすがイサオちゃんだ。いい考えだなあ」

「やつぱりイサオちゃんは会長だけに頭も切れる」

みんなが感心してイサオを褒めそやした。彼は満更でもなさそうに、

「会長だからなあ、おれ。みんなのこと一番にいつも考えているから」

そう言う鼻の下をこすった。着古した黒い上衣の右手の袖がかてかてと光っていた。

「ところでどこに見学にいぐの。おれんちのかあちゃんしつこいから。詳しいこと聞かれたら困るから」

パッサは遠慮がちに聞いた。

「おっと、肝心なことを忘れていた北目城跡の見学ということにすつぺや。競馬場は北目城の近くだつていうから。んだべ（そうだろう）ミノコ」

「ああ、うんだ、うんだ。ぴつたしだよ。これでかあちゃんだづも疑うごどねえべすた」

「ああ、よがつた。これで安心だ。集合場所はミノコの馬小屋の前だね」

皆は声を揃えて明るい声で言った。

その日、子どもたちは風呂敷に包んだにぎりめしを腰に巻きつけ、勇躍競馬場に向けて出発した。彼らはまっすぐに進むなどということはしない。川を見れば「魚がないか」とのぞき込み、虫を見つければ我先にと捕りかかるのだった。この季節、果物はなかった。あれば渋柿であろうが未熟な栗の実であろうと手を出さずには

おれなかった。田んぼの中の農道や馬車の轍が深く刻まれたでこぼこ道をわいわいと声を出しながら歩いて行った。その後ろを黄色い蝶々がひらひらと舞っていた。

「おめえだづパンパンって知っているが」

突然イサオが言い出した。その目はいつもの彼らしくなく何か濁つたような色をしていた。

「パンパン」

首をかしげながらマサルが問い返した。

「んだ、パンパンだ」

イサオは吐き捨てるように言った。

「パンパンって信代ちゃんの店で売っているパンのごどが」

マサルの返答にツギオはにやにやしている。どうやら彼は意味を知っているようだ。

信代ちゃんとはパッサの近所で小さな雑貨屋を開いている。夫は戦地のビルマで行方不明のままであった。

「わがつた。パンパンってパンが二つのごとだ」

パッサが得意そうに言った。

「やつぱりおめいだづはまだやろつこだな。パンパンって・・・」

途中まで言うといサオは口をつぐんでしまった。

「いい、この話はここまでだ」

そう言うど持っていた竹の棒で道路の端の草を打った。千切れた葉が空中に弧を描き、田んぼの泥土に刺さった。飲み込んだ飴玉を途中から抜き取られたような不満顔のマサルやパッサを見てツギオは「そのうち（そのうちに）わがるがら」と、へらへらと笑った。

林や森が続く道を進むと突然視界が広がった。前方にバラック建ての建物がいくつか見えた。その周りには大変な人ばかりであった。馬の姿も見える。立ち並ぶ屋台もあった。屋台からは青い煙が立ち、風に乗って肉を焼くような臭いが流れて来た。地面は天気が良いのに濡れて泥まみれであった。短い草が生えているお陰で靴が潜り込まずにすんでいた。馬糞がところどころに落ちて、それが崩れていた。パッサはゴムの短靴だったのでそれほど濡れずにすんだ。しかし、ミノコやツギオは草履であったのでたちまち足は泥だらけになってしまった。しかし、そんなことは日常のことで、雨の日などは裸足で登校することさえあった。この程度のこととは少しも気に留めなかった。

「やっと着いたな。何だかい匂いがするぞ。なんだべや」

「イサオちゃん、イカの焼いた匂いでねえべか。焼きイカだよ」

物知りのミノコが指さしながら言った。

「焼きイカつてうめえんだらうな。食いでえなあ。なんぼすっかな」

「ツギオ、おめえなんぼ銭つこ持ってんだよ。五十円はすつとよ（するよ）」

「銭つこなんか持つてねえよ。でも食つてみてえな」

「今度鉄屑売つて儲けたらみんなまで食つてみっぺ。それまでがまんだな」

「イサオちゃんの言うとおりで。今日は匂いだけでがまんすつぺ。あのイカは鉄板でジュウジュウと焼くんだよ。焼き上がる瞬間に醤油かけるんだ。その醤油の焼けた匂いがとつてもいいんだよ」

「ミノコ詳しいんだな」

「うんだ。じいちゃんに連れられて福島に行った時初めて食つただよ。うめがったよ。ほんとにうめがった。マサルも絶対食えよ」

「うん」と答えたマサルの口の中は唾液であふれているようだった。

この頃の子どもたちの小遣いはせいぜい一日五円ほど

であった。それも、紙芝居の水アメかウメ酢代に行き先が決まっていた。ただし、この時期朝鮮戦争があり、古物商に古鉄や銅など金物を売ることもあった。従つて、時に子どもでも百円近い「大金」を手にもすることもあった。しかし、それは稀なことであった。

前方に人だかりが見えた。その人だかりの真ん中に一人肩から先が抜きんでいた男がいた。小さな木の台に乗り、左手に十センチ四方の紙束を持ち、鉛筆を持った右手を振り上げて何やら大声を上げていた。そんな人だかりの輪が三、四箇所もあった。

「ミノコ、あのおんちあんだづ（おじさんたち）は何すてんのや」

「あれが、あれは予想屋だよ。次のレースの予想を紙に書いて売るんだよ」

「当たんのがや」

パッサの問いにミノコは、

「まあ、当たるごどもあれば外れるごどもあるさ。一種の神頼みみだいなもんだな」

ミノコはパッサを諭すように言った。

「どうやら次の発走が近いようだ。パドックさ行ってみるべ」

ミノコは水を得た魚のごとく生き生きとしてみんなを指図した。

「発走つていうのはレースで馬がスタートするごどだ。ほんでパドックつていうのは発走前の馬の下見をするごどごろだよ。今がら行つてみっぺ、っちゃ」

マサルたちの質問にそういうとミノコはみんなを先導した。

やはりパドックもたくさんの人だかりであった。腹掛けをした者、印ばんでんをきた者、前掛けを垂らした者、そして畑仕事を放り投げて駆けつけて来たと思われる野良着姿の農夫、それらは一樣にねじりはちまきをしていた。さらにはソフト帽を被った紳士風の男性も見えた。

その群衆の頭の向こうに派手な衣装を着た騎手と馬の頭部分が見えた。騎手も馬の頭もリズム良く上下していた。この群衆の隙間を身をくねらせながらミノコは上手に前へ進んで行った。そして左手を挙げて振った。「おれに続け」という合図であった。子どもたちは一列になってその隙間を縫つて最前列に出た。馬糞の臭いが鼻をついた。

子どもたちの真向かいに電柱のような大男がいた。

「おい、アメリカ人だぞ」

ミノコがパッサたちの方に振り向き、小声で言った。
「アメリカ人だつて」

パッサも内緒事を伝えるように右手を丸めて口に添えながらマサルに伝えた。「アメリカ人」という声はあつという間に他の子どもたちに伝わった。

子どもたちは皆伸び上がるようにして真正面に視線を集めた。そこには鼻が高く目が落ち込み、彫りの深い顔立ちの男が笑顔で立っていた。

「白人だ。丸い帽子を被っているぞ」

「兵隊服でねえな。でも随分でっけいな。日本人の二倍ぐらいあつかな」

「マサル、それは大げさだべ。んでも大つきいことにはかわりねえなあ。あの黒いメガネなんでかけてんだ」

「ツギオ、あれはサングラスって言うんだよ。アメリカ人は目が弱いらしいんだ。でも格好いいな」

イサオもいつもの大声を抑えている。

「あのアメリカ人の腕にぶら下がっている女の人はだれ」

黄色のワンピースに黒く細いベルトを締めている。肩の辺りまでの髪がクルクルとカールされている。真っ赤な唇である。髪の色と対照的である。彼女の頭はアメリカ

カ人の胸辺りしかない。アメリカ人の左腕に両手を絡めている。アメリカ人が右手を挙げる度に両腕を伸ばし、背伸びしている。それがパッサにはぶら下がっているように見えたのであつた。

「あの女がパンパンだよ、マサル」

「パンパン」

パッサも、マサルも、ツギオもミノコの声に驚いた。「んだ。ああやってアメリカ人にぶら下がって銭っこもらつてんだ」

ミノコは蔑むように言った。

「あの人はパンパンでねえよ。オンリーっていうんだよ」

イサオは少し向きになっている。

「イサオちゃん、パンパンとオンリーはどう違うの」

パッサはそんなイサオの気配も知らぬげに尋ねる。

「パンパンはアメリカ人なら誰でもいいんだ。オンリーは一人のアメリカ人に尽くす女だよ。結婚しているようなもんだ」

「うーん。尽くすって何するわけ」

「この話もういい。おれたちにはどうでもいいことだから」

イサオは声を荒げた。頬が紅潮し、目が吊り上がっていた。

「パッサ、もうこの話は止める。これ以上言うとイサオちゃんにぶんなぐられるぞ」

ミノコがパッサの耳元に囁いた。

パッサは不満げな表情を隠すように黙って下を向いてしまった。

「ミノコ、騎手が着ている服はずいぶん派手だけど、あれ何ていうんだべが」

ツギオがその場の雰囲気を変えるかのように話題を逸らしてきた。

「あの制服は勝負服っていうんだよ。騎手によって違うんだ。パドックでは初め、騎手は馬に乗らない。最周回に乗るんだよ。騎手が乗っているから後一周で馬場に出るぞ」

「ミノコは馬のごとはなんでも知っているんだな」

「ああ、じつちゃんに付いて競馬場にいぐうちに覚えたんだよ」

「騎手が乗っているのに何で馬を引いている人がいるんだよ」

「マサル、あれは万一馬が暴れて騎手や馬がけがしない

ように引いているんだよ。厩務員というんだよ」

「へえ、キュウムインか。難しい言葉だな」

マサルの言葉が終わるか終わらないうちにパドックの扉が開かれ、厩務員が誘導して馬場へ向かった。それにつれ、パドックの周りにいた人たちが一斉に動き出した。大部分が馬券売り場に向かっていった。その群れの中にひととき目立つカーボーイハットを被ったアメリカ人の後ろ姿があつた。ぶら下がっているように見えた女の姿は群れの中に没し、見えなかった。

パッサたちはその流れと反対方向の馬場に向かった。

木造の小さな観覧席があつた。しかし、そこは馬券を手にした男たちですぐに埋め尽くされた。パッサたちはこの正面の向かい側に向かった。そこは土手になっていて、野球場でいう芝生の外野席のようなものであつた。しかし、きれいな芝生が生えているわけではなく、雑草が好き勝手に、まるで高さを競うように生えていた。競馬場では発走する馬たちが馴らしの走りをしていく。

「ちようどいい時間だ。おにぎり食いながら見っぺや」

イサオが年長らしくみんなの顔を見渡しながら言った。どうやら機嫌を直したようであつた。

「んだ、んだ。イサオちゃんの言うとおりで。それに

ちようど昼時だ、腹もへっている。弁当にすつべや」
 そう言いながら次男は手をかざし空を仰ぎ、太陽の位置を確かめた。

「競馬見ながらおにぎりを食うなんて最高だよ」
 とパッサは言いながら腰の風呂敷を解いた。

日がまさに中天に差し掛かるうとしていた。パッサたちが腰を下ろしている土手の背後から甘い風が流れていた。土手のすぐ向こうには広瀬川が流れていた。この広瀬川は仙台市中心街の西部から南部に沿って流れ、現在でもアユが群れる市民自慢の清流である。この当時は水量も豊かで、川幅いっぱい透き通った水が滔滔と流れていた。秋には鮭が遡上していた。

子どもたちが広げたおむすびは新聞紙に包まれていた。海苔などで巻かれているものではない。麦飯を丸めただけであった。それでも各自半分ほどに切っただいこん漬や梅干し、味噌を用意していた。よく見ると新聞の活字が薄くおにぎりに付いているものもあった。どこから嗅ぎつけて来たのだろうかハエが数匹子どもたちの周りに羽音を立て始めていた。

「ようやく出走するみたいだぞ。スターターが台の上立って旗を横に振り始めたからな」

ミノコは目の上に手をかざし、細い目をいっそう細めてスターターの方を見つめている。

「ミノコ、馬が並んだら走るのか」
 「うんだけれど、スターターが旗を降ろしたら出走だよ。ツギオ」

「なるほど、しかし、なかなか馬が揃わねえな」
 「ツギオ、馬にも落ち着きのねえものと落ち着きのあるものいるし、それに騎手の作戦もあるんだよ」

「ふーん、なんだかおれたちみたいだな。んでもスタートするまでは結構大変なんだな」
 ツギオは腕を組み、さも感心したように頭を上下に揺らしている。

下がったり、横にそれていたり、前足を上げたりしていた馬が一瞬揃った。その瞬間をスターターは見逃さなかった。振り上げた大きな旗を勢いよく下ろした。各馬一斉に走り出した。それを見ていた子どもたちはおにぎりどころではなくなった。しかし、一斉に走り出したはずなのに中に一頭、騎手の手綱裁きに従わず馬体を横に向けながら外柵に向かって行くのがいた。騎手は手綱を引つ張り、馬の顔を正面に向けようと必死の様子である。両足の拍車で馬の腹を蹴り、そして思いっきり馬の尻を

鞭で打った。その瞬間、馬はまるで己の誤りを気付いたようにはっとなって地を蹴って走り出した。観衆から笑い声や罵声が飛んだ。最後尾から三馬身ほど離れ、その馬はまるで遅れを取り戻すように疾走し始めた。地面を蹴る度に土くれが後方へ勢いよく飛んでいった。ひとかたまりとなって疾駆する馬は第一コーナーを回るときには二つの固まりに、そしてパッサたちの前を駆けて行くときには固まりはなくなり線となっていた。目の前を走る馬たちの足音がパッサたちの耳に響き、ドドと地を揺るがした。どの馬も鼻を大きく膨らましている。眼はこれ以上ないくらいに開ききっていた。パッサは馬たちの見開いた必死の眼に感動を覚えた。そして、普段目にしていない馬とは別な種類の馬のように思えた。普段目にしていない馬は力強さが見られたとしても、全体としては鈍重な感じで、体型もずんぐりとし、体高は競走馬に比べ低いように思えた。それに対し、今目前を疾走している馬は、まるで走る機械のように思えた。無駄な筋肉はなく、あたかも全ての筋肉が駆けるために武装されているようだった。すらりと伸びた足は大地を蹴ると全身は地を離れ、まるで放たれた矢のように一直線に前方に向かう。お尻の筋肉とそれに連なる大腿筋は皮膚の下で、正

確に、そしてリズムミカルに波打っている。日を受けて汗が白く輝いていた。馬たちはまるで何者かに引つ張られるようにひたすらにゴールに向かっていく。それは、まさしく翔がごとしであった。パッサは惜しげもなく、そして誇らしげに筋肉を躍動させる姿に、声を失った。そしてしばらくして「競走馬って美しいなあ」という言葉が彼の口から漏れた。

わー、という歓声が響いてきた。
 「やつぱり4番の馬が差し切ったな。ジョッキーの腕が勝っていたんだべ」
 口調と言い、その話の内容と言い、ミノコはおとな顔負けであった。

「おれもそう思うけど、ジョッキーが抑えて馬の力を溜めていたんだよ。第三コーナーまでは四番手ぐらいの位置につけ、そこから鞭打ったべ。馬は縮んだゴムボールが一気に膨らんだようにダッシュしていった。あれじゃ他の馬はかないっこねえよ。やつぱジョッキーの腕だな」

どうやらイサオはその口調からすると競馬場には馴染みのようであった。他の子どもたちは口をばかんと開けて二人の会話を聞いているだけであった。

「今のレースはチャンタだったから次はダグだな。ダグはのろくておもしろくねえがらもう一回パドックや馬房の方さ行ってみねえが」

「ミノコ、チャンタとかダグってどういう意味がね」

「ちよっと説明が難しいな。とにかくチャンタは速いレースで、ダグは遅いレースっていうことだよ」

ミノコは二学年も上のツギオにまるで先輩のような口調で説明した。

だが、ツギオはミノコの説明には不満そうな顔であった。それを見取ったイサオが、

「おれも詳しくはわがんねえけどチャンタは正式にはキヤンターと言うらしい。キヤンターは駆歩（かけあし）のことで、ダグは多分速歩（はやあし）のことだと思う。ダグは走っているとき四本の足の一本は必ず地面についていなくちゃなんねえらしい」

「イサオちゃん随分詳しいな。いつそんなことまで覚えてんだ」

ツギオの言葉にイサオは右手の人差し指で鼻をこすり、白い歯をこぼした。

「今まで内緒にしてたけど知り合いがいて、その人に連れて来てもらっているんだ」

「なあんだイサオちゃんずるいな、それだったら最初から言ってくればよかったのに、なあミノコ」

ミノコはツギオの言葉に応えなかった。自分のお株を取られておもしろくなかったのかもしれない。

「ダグっていうのも見てみてえな」

パッサの言葉にツギオもマサルも「んだ、んだ、おれたちも見てみてえよ」と一斉に声を上げた。

「みんながそう思うなら仕方ねえな。ダグ見つか」

ミノコはつまらなさそうにして座り込んだ。それに釣られた他の子どもたちも座り込み、食べかけのにぎりめしを再び口にした。その匂いを嗅ぎつけてきたのだろうか再び数匹のハエが音を立てて子どもたちの周りを飛び始めた。ハエの季節には少し早いのだが、馬房があり、その上気温が高めであったのでハエが発生したのだろう。しかし、子どもたちは少しも気にせず黙々と食べた。

「おい、誰か水持ってねえか」

イサオが大声で叫んだ。

「おれ持つてる」

マサルがおずおずとイサオに水筒を渡した。イサオはそれを手に取ると栓を抜き、空を見上げながらゴクゴクと音を立てて飲んだ。むき出しになったイサオの白い喉

が水の通過と共に蛇腹のように上から下へと動いた。

「ああつ」とマサルが声を上げた。

するとイサオは水筒の吸い口を口から離し、マサルの方を見やった。

「大丈夫だよ。マサルの方もちゃんと残すよ」

そして「ああ、うまかった」と言いながら口の端を袖でぬぐった。お下がりがらしい黒い服はイサオにはもう小さくなっていった。袖口はくるぶしから五センチも上にあつた。そしてその袖は乾いた鼻汁でテカテカと光っていた。

「ありがとう」と言うと、にこっと笑い、水筒をマサルに渡した。

水筒はあちこちへこんだり、色ははげたりしていた。

マサルの叔父が軍隊から持ち帰り、それをマサルにくれたものだった。マサルはそれを受け取ると、やはりそれを口にした。いかにも大事そうにすすりながら飲んだ。水筒をほんの少しだけ斜めにしていた。どうやらマサルは一気に飲み干したい欲を抑えているようだった。他の子どもたちへの配慮のようであった。

マサルは未練がましそうに吸い口を口から離し「はい、みんなも飲んでよ」とツギオに渡した。ツギオは満面の笑みでそれを受け取った。ツギオも残った子への配慮を

し、ミノコへ渡した。ミノコはパッサに水筒を渡すときパッサの耳元に囁いた。

「イサオちゃんの姉ちゃんはオンリーなんだ。お前だけに教えるから他には黙っているよ」

パッサはきよとんとなってミノコの顔を見詰めた。ミノコは右手の人差し指を立て、それを唇に持っていた。

そして、「シー」と静かに音を立てた。パッサは不満顔ながらに黙した。

「全部飲んだよ」

水筒を逆さまにしてその底をトントンと叩きながらマサルが叫んだ。マサルの顔は満足そうな笑みが溢れていた。

子どもたちに退屈ということはない。食べ終わる子どもたちは土手の斜面を利用して丸太のように転がった。追いかけっこをしたりで、少しもじっとはしていなかった。その子どもたちの頭上を単発機がプロペラの音を高く上げながら悠々と通過していった。横腹に白い星のマークが鮮やかに見えた。子どもたちは「アメリカ、アメリカ」と大声を張り上げ、そして手を振った。「マッカサーが乗ってるのかなあ」とマサルがぼつんとつぶやいた。

「まさかマツカサーが乗っている訳ねえべや」とミノコが言い、そしてマサルをなでた。

「マサルはマツカサーに頼んで父ちゃんを返してもらいたいんだべ」

マサルはミノコの顔をじっと見詰め、そしてこくりと頷いた。

ミノコはマサルの気持ちがよく分かっていたのだ。彼の父はフィリピンのマニラで戦死していた。そしてマサルの父は満州で行方不明のまままだ帰還していなかったのである。マサルは天皇陛下より偉いマツカサーに頼めば父の行方が分かると思ったのであろう。

「次のレースがそろそろ始まる頃だぞ」

ツギオがしんみりとなった場の雰囲気を払うように大声で言った。

「おい、みんなバドックから人が馬場に移って来ているぞ。レースが始まるぞ。ダグのレース見ようぜ」

ツギオの声を受けて竹ちゃんがみんなに声を掛けると同時に競走馬が馬場に入ってきた。その馬はどう見ても前のレースの馬とは違っていた。パッサが毎日見ている馬と全く変わりがなかった。足は短く、太く、背も低く、顔ももつさりとしていて先の競走馬の精悍さは全くな

かった。しかし、騎手の着ているレース服は鮮やかな赤やブルー、黄色などの下地に星や斜めの線などが詠えられてカラフルであった。それが風になびいて揺れており、まるで馬場に花が咲いたようであった。

「なんだか農耕馬と同じだな。あれで本当に馬場を一周できるのか」

ツギオは心配そうであった。

「農耕馬ってみんながいうけどそれは嘘だよ。ちゃんと調教しなければ騎手の言うとおりに走らないんだよ。それにダグの走り方も覚えさせなければならぬから人が思うほど簡単ではないんだ」

「ミノコの言うとおりだよ。ダグはチャンタに比べれば格好よくねえけど乗り役の騎手は結構苦労するらしいよ」

イサオはおとなびた口調でミノコに続けた。

「うんだ、いいこと考えっちゃ。おれだづ馬券買えねからそのかわり嘘この馬券買うべ」

「嘘この馬券って何っしや、イサオちゃん」

「それはなマサル、馬券を買ったつもりでどの馬つこが一等か当てんのや」

「うーん、そんで一等を当てたやつは何か賞品もらえん

の」

ツギオは袖を捲り上げながら聞いてきた。

「賞品って言っても何にもないからさ、当てたやつを帰り道、みんなすて交代でそれぞれが電柱から電柱までおぶるっていうのはどうかな」

「それはおもしろえ。イサオちゃんは頭がいいねえ」

マサルは両手を突き上げながらぐるぐると回った。その他の子どもたちも「賛成、賛成」と叫んでいた。子どもたちはこの種の遊びである「電柱から電柱まで」をよくやっていた。下校途中、ジャンケンで負けたものが全員のをもち電柱があるところまで持つのである。そしてまたジャンケンをして持ち役を決めるのである。下校の帰り道を楽しむ一つであった。

「だけど条件があるんだ。まず一つは馬を選ぶ順番はジャンケンで決めること。勝った者から選んでいくこと。そして当然ながら選ばれた馬は除くこと。これでどうだ」

誰からも不満はでなかった。それどころか他の子たちは「うーん」と言いながら感心していた。そして、このイサオの提案をきっかけに子どもたちはこれまでの漫然とした見物とは一変し、真剣に馬を観察し始めたのであ

る。馬体がどうのとか、毛づやがいいとか悪いとか、さらには騎手の手綱さばきまで言及していった。子どもも耳は聡い。どこかで挟んだ知識が勝ち負けに左右すると知った瞬間フル回転し、知恵となって機能し始めたに違いない。それが会話にも現れた。俄然話が持ち上がり賑やかなことこの上なかった。出走馬は八頭であった。子どもたちは拳に力を込め、大声でじゃんけんを始めた。霞んだ空が暖かく子どもたちを包んでいた。土手には野草が茎を伸ばし、葉を広げ、それが日の光を受け緑に輝き、子どもたちの叫び声に共鳴するように小さく揺れていた。

直に馬はスタートを切った。横一直線がたちまち団子状態になった。チャンタのように縦線形にはなかなかならなかった。子どもたちの応援のかけ声が空に響いた。

にぎりめしを包んで来た風呂敷を広げて応援する者、転がっていた棒きれを拾い上げ打ち振る者、両手をメガホン代わりに口に添え大声で叫ぶ者と、子どもたちの力の入れ方は尋常ではなかった。走るにつれ、さすがに馬群は割れていった。先頭集団が四頭、二番目の集団が三頭、二馬身ほど離れて最後尾が一頭であった。

第二コーナーに近づくにつれ、ド・ド・ド・ドという

馬の大地を蹴る音が次第に高くなって来た。チャンタで走る軽やかさではない。また、空中に浮いて空気を切り裂きながら疾駆する鋭さもない。ただ紛れもなく自分の存在を力強く示す走り、まるで風をブルドーザーで押し切るような走りであった。さらに第二コーナーを曲がり、子どもたちのいる正面に近づいてきた。第二群が第一群に溶け合うようにして一群となった。どの馬も鼻の穴を大きく膨らませ、眼は生真面目そうにまつすぐ前方をびたりと見据えている。パッサにはその姿がとても偉く見えた。騎手はまだ手綱を絞ったままである。順位が下がるにつれ騎手のカラフルな勝負服には付着する泥が多くなっていった。

その時であった。馬群の中央にいたひとりの騎手が突然馬の群れの中に消えた。そして、どさつという鈍い音がした。子どもたちのひとりギヤツと声を上げた。落馬したのである。馬群はあつという間に過ぎ去った。蹄の跡が点々と残る地面に騎手は手と足をだらりと広げ、伏せつたままであった。子どもたちは呆然とし、誰も言葉が発しない。遅れた一頭が倒れた騎手の前方をトクトコと尻を振りながら走っていった。まるで「われ聞せず」みたいな馬の走りであった。その馬が走り去った後

に、倒れた騎手が伸びた手を押し畳むように手元に引き寄せ、その手をゆつくりと地面に突き立てるともそもそと起き上がった。そして、服やズボンの泥を払うと鞭を拾った。その行動はまるでスローモーションのようであった。そして、拾った鞭でまるで自分を叱責するように右足の長靴を打った。皮が皮を打つ乾いた音がピシッ

と子どもたちの所まで聞こえて来た。

その音で子どもたちは我に返った。そして誰ともなく拍手を始めた。その拍手は一瞬にして大きくなった。周りにいたおとなたちも一緒に拍手をしたのである。拍手の音が止むと子どもたちは安堵したかのように、ハーツと大きな息を吐いた。

騎手はぐるりと首を回した。馬を探しているようだった。馬は十ほど先でまるで散歩でもしているように首を縦に振りながら歩いていた。騎手はそれを認めると歩き、そして小走りになって寄っていった。観衆から再び拍手が湧き、「がんばれえ」という激励の声も響き渡った。騎手はその声に応えるかのように鞭を持った右手を高く掲げ、振った。

「あの馬つこの番号7だ。おれの選んだ馬つこだ。おれはびりつけつだ。うんだけれどもあの騎手が無事でいがつ

たな」

マサルらしいやさしい言葉だった。

他の子どもたちも先ほどの興奮がしぼんでしまったようだった。

「落馬があつたからこの勝負はながつたことにすつべ。これからもここさには何回もこれっからな。いいべ」

イサオはリーダーらしくきつぱりと言いつつ、マサルの心中を思いやつの言葉だと言ふことは誰しも理解できたのだった。

薄雲が切れ、太陽の光が子どもたちに降りかかってきた。その光に誘われたのか季節にはちよつと早いシオカラトンボがスイとこどもたちの頭上を過ぎていった。

「おれ絶対に騎手になる。中央競馬会の騎手だ。絶対になつからな」

ミノコが突然空に向かって大声で叫んだ。

「ミノコがなればよ。おれたちみんなおめえば応援するがらな」

イサオもミノコに負けないほどの大声で叫んだ。他の子どもたちもみんなうなずき、そして声を揃え「ミノコがなればよ」と叫んだ。

かった。むしろ貧しいと言つた方がよい子どもたちであった。人は希望や夢を持てる動物である。どんなに厳しい環境の中でも希望や目標を持ち続けられるならば強く生きられる。「夢を持つ、希望を持つ」という言葉がみずみずしく息づいていた時代であった。

(続く)